

共生のきずなを求めて!

# NPO 現代座

2020 年 6 月 1 日 発行  
(通巻 485 号)

## 現代座レポート No. 82

- ・近況：人類はどこへ向かうのか 木村快 (1)
- ・2019 年度活動報告 (2)
- ・2019 年度経理報告 (3)
- ・木村快ノート「われらいずこより来たる」② (4-6)
- ・誰でもできる朗読教室 第 8 期生発表会 (7)
- ・会館日誌 会員入会、継続、寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987



◆いつもなら全国からの参詣客でにぎわう善光寺も、非常事態宣言後は全く人影がない。

### 近況

## 人類はどこへ向かうのか

新型コロナウイルスの蔓延で、現代座の活動も全面的にストップしている。

98 歳になる木下美智子の父の介護のため、月に一度、長野市へ出かけているが、長野県はこの 4 月の緊急事態宣言のために規制が厳しくなり、父親は東京都からの訪問者と接触したということで、公的ヘルパーの世話も中断され、「アイ・サービス」へ行くことも禁じられた。われわれも帰るに帰られず、やむなく善光寺下にある実家近くのアパートで、父の生活を見ながら暮らし、普段考えないことを考えてみたりしている。

いったいぼくの仕事はなんだろう。「大げさな」と思われるかもしれないが、「劇場」という現象は人類文化の根源を表す現象である。人は無意識のうち「人の群れはど動くか」をいつも気にしている。それはまた人間が運命共同体的生物であることを示している。その意味で「劇場」は一堂に集まって、人の心と体を直接見つめ、根源的心情で見守る芸能である。人間は言葉以前の、身体を共鳴させる場がなければ、力を合わせる関係は作れない。

連日、接触・移動の自粛を呼びかけているが、問題はその後、コロナが収まったあとどうするかだろう。経済の復興以前に、人間らしい力の回復はどうなるのか。

仲間の「希望舞台」や、北海道で活動している「こぶし座」のことが気になって電話を入れてみた。

【こぶし座】はアイヌ文化や民舞の公演を続けていたが、この 3 月以来全てキャンセルになり、今後の見直しも立っていない。何よりも生活が行き詰まっている。補助金等の申請もしているがなかなか思うようにいかず、支持者に募金をお願いしてなんとかやっている。「でも声をかけてくださったので、とても励まされました。お互い声を掛け合って、なんとしても生き抜きます」

【希望舞台】は昨年、福島県下で水上勉作「釈迦内枢唄」の公演を続けていたが、秋の台風で 2 力所の公演が延期になり、今年 3 月にあらためて公演の準備をしていたところ、今度はコロナでだめになった。スタッフや俳優の生活をどうやって守るかいろいろ奔走している。

人類は自然との関わり方をめぐって、やっと一緒に考え合う時を迎えたのか。いや、まだか。

自分は自然の一部として生きているのだから、自然と向かい合って、共に生きる心を貫こうと思う。(木村快)

## NPO現代座2019年度活動報告

## 財政状況

左の表は東京都に提出した「活動計算書」です。

2019年度は200,0238円の黒字でした。これは現代座の赤字を心配した会員の方が「終活のひとつとして寄付したい」と100万円のご寄付を寄せてくださったおかげです。また、かなり前の公演実行委員会から「黒字分を取っておいだがやはり現代座で使ってください」と182,274円のご寄付をいただきました。他にも28人の方からご寄付をいただきました。金の合計は1,299,274円でした。

会費も300人近い方が寄せてくださいました。会費の1,328,000円とご寄付のおかげで、何とか基本的な活動を成り立たせることができました。本当にありがとうございます。

## 活動報告

## ①地域劇場づくり支援事業

これは現代座会館を地域の方や創造活動をする方に活用していただく事業です。

## ◎地下ホールと3F小ホール

ホール公演2団体、3F公演4団体、稽古等は8団体で、前年よりは減少しました。しかし「希望舞台」をはじめとして、「クロジ」「ふるきやら」「燐光群」「トマト座」などいくつもの劇団が毎年稽古に使ってくださいますし、今年度はじめて使う団体も3団体ありました。

また津田さんご夫妻の生徒の発表会「リトルコンサート」は今年度も2回行われました。

## ◎定例活用

毎週行っているのは「小金井熟年会」の集まりと、通信制大学生支援の「教育文化経営学院」と「教育文庫」です。現代座の俳優が企画する「ヨガ教室」も週2日行われ地域の方が集まっています。

また毎月一度地域のお年寄りが集まる「緑町ふれあいサロン」が行われていますし、緑町第二町会は役員会や総会にも使っていました。

## ②制作上演事業

## ◎スクリーンでみる木村快の作品

## シリーズ第2回「出航」

舞台のビデオを見て木村快の世界を知ろうと企画したところ、上映してみると、現代を見つめ、考える貴重な機会になることを発見しました。

昨年の第1回「風は故郷へ」に続いて、第2回「出航」を5月31日から6月2日まで3日間上映しました。

## ◎第3回バラエティ劇場

2月7日から9日まで3F小ホールで「第3回バラエティ劇場」を行いました。今回は1部がBONBON組の皆さんによる落語とお芝居等、2部は今村純二と現代座メンバーによる「失われた協同の記憶『群来(くき)』」でした。『群来』ではニシン漁の作業を説明しながら、客席みんなで唄い、大変好評でした。

## ◎セミナー事業

『誰でもできる朗読教室』第7期、第8期

長谷川葉月さんが講師の初心者向け朗読教室は、基礎訓練を丁寧にながら、半年間で発表会までやる12回の講座です。4期からは昼のクラスだけでなく夜のクラスもやっています。ずっと続ける人が多いのが特徴ですが、各期新しい受講者が新鮮な風を吹き込んでくれています。発表会は合同で行いました。本紙7ページをご参照ください。

## ④その他

## ◎現代座会館の整備

今年度も大きな修理などはできませんでしたが、1階事務所のエアコンを新しい物2台に取り替えました。

## ⑤今年度の活動について

今年は本格的な芝居をしようと、みんなで話し合い、協同をテーマにした『風は故郷へ』を再演することになり、台本も書き直しました。

3月末に打ち合わせをして、5月から稽古を開始し、9月はじめに公演の予定でした。ところがコロナ感染のため、3月の打ち合わせが出来ず、5月も出来ません。そんなわけでいつ開始出来るのか全く見通せない状況です。

現代座会館を活用して稽古や公演を予定しておられた劇団も、3月からは全て延期になり、地域の集まりも出来なくなり、今年のホール使用の予定は今のところ全くありません。

今しばらく様子を見て、場合によっては抜本的に考え直さなければならぬかもしれません。

## 2019年度 活動計算書

2019年3月1日から 2020年2月29日まで

特定非営利活動法人 NPO現代座  
(単位:円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取会費		1,328,000
2 受取寄付金		1,299,274
3 受取助成金等		
公共団体補助金	0	
民間助成金	0	0
4 事業収益		
①地域劇場づくり支援事業収益	3,400,950	
②制作上演事業収益	390,500	
③セミナー事業収益	590,000	
④国際協力事業収益	0	
⑤まちづくり事業収益	0	
⑥子ども健全育成事業収益	0	
⑦会報発行事業収益	0	4,381,450
5 その他収益		
受取利息	6	
雑収益	108,258	108,264
経常収益 計		7,116,988
II 経常費用		
1 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	1,102,800	
(2) その他経費		
制作・準備費	22,290	
創造・上演費	60,296	
交通・通信費	240,660	
資料・印刷費	36,573	
消耗品費	489,424	
会報・HP経費	656,942	
その他経費 計	1,506,185	
事業費 計		2,608,985
2 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	599,400	
(2) その他経費		
通信運搬費	596,254	
消耗品費	317,978	
OA経費	444,624	
雑費	219,862	
光熱水道費	859,647	
租税公課	70,000	
家賃	1,200,000	
その他経費 計	3,708,365	
管理費 計		4,307,765
経常費用 計		6,916,750
当期正味財産増減額		200,238
前期繰越正味財産額		363,392
次期繰越正味財産額		563,630

当期において、その他事業は実施していません。

## 木村快ノート◆われらいずこより来たる②◆ 敗戦後の激動期

### ■ GHQ政策に翻弄されながら

前号では「ヴェリテ・せるくる」のことを紹介したので、その生まれた経過について書いてみたい。

敗戦国日本は連合軍最高司令部（略称GHQ）の指示によって再建がすすめられていた。敗戦による価値観の大転換で、何事によらず極端に走るものが多く、当時の記述を読むとき、そうした背景を念頭に置いておく必要がある。

敗戦後はまず治安維持法で拘禁された人々が解放され、共産党の復活、労働運動の高揚とともに、合唱活動やサークル活動も息を吹き返した。

映画界は大変だった。刀を振り回す時代劇は制作禁止で娯楽映画に携わる人々は苦勞している。反面、「民衆の敵」、「暴力の町」、「また逢う日まで」といった左翼ヒューマニズムの名作も生まれている。

演劇界では1946年、かつて政府によって強制解散させられた「新協劇団」が復活する。戦前の抑圧の反動で左翼思想者が多く、上演作品も政治主義的な傾向が強かった。兵士として戦地に派遣されていた宇野重吉も復員後参加していた記録がある。

いったんは平和志向に向かいながら、敗戦4年目、1949年に中華人民共和国が成立し、1950（昭和25）年6月に朝鮮戦争が始まると、共産主義の脅威が公然と語られるようになり、GHQは一転して共産

党中央委員会を追放、レッドパージと呼ばれる報道機関や職場からの共産党員追放が始まる。そして厄介なことに左翼思想家の間でも「占領下でも平和革命は可能」とする日本共産党に対して「コミンテルン（世界共産党・労働者党情報局）から批判が向けられ、これを容認するソ連派と反対する中国派の対立が起こり、その影響で新協劇団の内部でも分裂が始まる。これを容認する主流派に対して、反主流派は別劇団の設立を準備していた。その後生まれる「劇団・中芸」である。

### ■ 「ヴェリテ・せるくる」の誕生

劇団内のどちらのグループにも入れず、取り残され

「ヴェリテ・せるくる」昭和25年12月のメンバーと年齢。



織田政雄  
当時 42 歳



大森義夫  
当時 41 歳



下条正巳  
当時 35 歳



草村公宣  
当時 36 歳



立川恵作  
当時 35 歳



真山美保  
当時 28 歳



佐野浅夫  
当時 25 歳



榎村浩吉  
当時 40 歳

たメンバーが集まりやすい場所は榎村浩吉・真山美保夫妻のアパートだった。真山は当時ラジオ・ドラマに出演しており、NHKの子ども番組「アイウエおじさん」に出演していた榎村浩吉と知り合い、結婚していた。

榎村は戦前、新築地劇団に所属しており、政府による強制解散後は広島を拠点にした「さくら隊」で丸山定夫や園井恵子らと活動していた。原爆当日は俳優を調達するため大阪に出かけていて一命をとりとめ、全滅した仲間たちの遺体を吊った過去がある。そのため、戦後の新協劇団には参加しなかった。

榎村は人柄も温厚であり、いずれも戦前からの顔なじみだから気兼ねなく集まることができた。また利害関係のない榎村は適切なアドバイザーでもあった。

「お前たちはどちら側なんだ」と突きつけられることに嫌気のさした彼らは、やむなく劇団を離脱して「ヴェリテ・せるくる」を設立することになるが、映画やラジオで知られていた主力俳優たちであったから、これを東京新聞に書き立てられ、それなりの考え方を表明しなければならなかった。しかし、明確な活動方針があったわけではない。

前号で紹介した「ヴェリテ・せるくる」はそんな経過で1950年10月に生まれる。最初はメンバー9名だったが、2名の女優は新協劇団の働きかけで復帰したから7名となり、女優は真山美保一人となる。フランス語の「ヴェリテ・セルクル」は「真実の輪」という意味だが、グループ名では「せるくる」とひらがなを使っている。これはフランス近代劇で社会問題の告発ドラマを展開した「自由劇場」に対して、芸術的な内容を重視すべきであると主張した「制作座」の故事

にならない、イデオロギーに翻弄される新協劇団に対して自由な芝居を目指したものだという。

### ■ 生活者の演劇

小さな芝居でもいいから、とりあえず何かやらなくてはいけない。たまたま人のいい草村公宣が新協から名古屋公演だけ出演してくれと頼まれ、最後の仕事として名古屋へ向かう。そして名古屋で偶然知人から紡績工場の慰安会で何かやってくれないかと言われる。ヴェリテのメンバーはあまり乗り気ではなかったが、織田政雄、草村公宣、真山美保の三人が木下順二作『彦市ばなし』とチエーホフの『熊』を持って出かけてみた。学校や紡績工場の集会場は一応の舞台設備を備えていたから小さな芝居ならやれると思ったからだ。劇団名は「ヴェリテせるくる・ためき座」と名乗った。

若い女子労働者たちは、『彦市ばなし』にはあまり反応しなかったが、『熊』では照明の中に浮かび上がる未亡人エレナを覗ただけで歓声を上げた。これはまったく意外な反応だった。彼女たちは話を理解すると言うより、照明に照らされたエレナが若い女性だったため、エレナになり代わって、ひと言ひと言に反応



チエーホフ「熊」の舞台

している。彼女たちは生活者の感覚で反応している。静かに舞台を鑑賞する新劇の観客とは全く異なる反応

だった。そして俳優としても、演じているのではなく、人物を生きているような実感があつた。

彼女たちは交流会でもエレナの話を生き生きと語り合っていた。そして別れるときは口々に「また来てね!」と言った。

この強烈な体験は、劇場の中に「生活者としての共感を創りだす演劇の道」もあることを教えてくれた。

### ■ 「ヴェリテ・せるくる」の解散と

#### 新制作座のスタート

1951年5月、毎日新聞中部支社主催の名古屋市松坂屋ホールで、モリエール作『守銭奴』を全員で上演し、批評もよく、引続き工場公演をつづけ、ようやく劇団としての基礎ができたかと思われた。そこで9月、スペインの作家モラティン作『娘たちの「ハイ」』を上演。本邦初演と云う意気込みにもかかわらず、思うような成果はあげられなかった。

この公演の失敗から、意見の不統一が表面化して来た。生活的な事情から映画、ラジオを含めた幅広い活動を主張する意見と、演劇活動一本を主張する草村、真山の意見の完全な対立の結果、1951年11月、グループを解散することになる。下条正巳と佐野浅夫は「民芸」に移籍。織田政雄、大森義夫、立川恵作はフリーとなり、映画やラジオの分野で活動することになる。

真山美保は初心を貫きたいと、草村と共に紡績工場での上演を続けることにした。この経過を見守っていた榎村浩吉は二人と行動を共にすることになる。

三人はヴェリテ・せるくるがスタートした時の趣旨

を受け継ぎ、フランスの「制作座」にならって新しい劇団名を「新・制作座」と改称した。

### ■ 真山美保の生いたち

真山美保は1922（大正11）年、歌舞伎を支えた作家として知られる真山青果の長女として、東京牛込に生まれている。父、青果は性格のきびしい人物で、娘に対しても、良家の子女としてではなく、あくまでも自立した女性としての成長を重視していたようだ。そのため美保は自尊心も強く、男性との論争でも引き下がることはなかったという。

真山青果は1942（昭和17）年に帝国芸術院会員になったから、青果の娘としても知られていた。

1943（昭和18）年9月、日本女子大学国文科を卒業。卒業が9月に早められたのは、この年、男子学生を学徒出陣で戦地に送り出すため、この世代は戦争によって圧殺された青春を送っている。



左から大谷竹次郎松竹会長、真山美保、真山青果、河原崎長十郎（前進座座主）

卒業後は前進座に入座している。写真はその時に撮影されたものと思われる。松竹の大谷竹次郎会長をはじめ、青果の知人たちによる配慮があつたようだ。前進座でどのような仕事をしていたかはよく分からない。

そして敗戦後は新協劇団に参加している。

### ■ 新制作座の第一作『泥かぶら』

1952年4月、サンフランシスコ条約が締結され、やっとGHQ支配が終わり、日本は独立国となる。

新制作座は真山青果の『玄朴と長英』、チエーホフの『熊』、小山内薫の『人形』などの小作品を持って10人程度の集団で巡演を続けるが、やはり自分たちなりの作品がなければと考え、民話劇『泥かぶら』を書いて学校公演で試演してみる。反応は悪くなく、紡績工場でも『熊』や『人形』と並べて上演するようになった。スタッフもキャストも全員一体となって劇場の反応に注目し、座談会で感想を聞き、改作を重ねながら一本立ちの作品に仕上げた。そして1952年12月、芸術祭に参加し、文部大臣賞を受賞する。

『泥かぶら』は、いつもいじめられる醜い少女が、あるとき旅の老人から「いつもにっこり笑うこと、自分のみにくさを恥じぬこと、人の身になって思うこと、その三つのことさえ守れば、お前は村一番の美人になれる」と教えられ、何度もくじけそうになりながら、次第に明るい少女となり、ある時、人買いに売られていく少女の身代わりとなって凶暴な男と旅をつづける



『泥かぶら』を演じる真山美保

が、いつか男の心も優しくなり、男は「ありがとう」と書き残し、立ち去って行くという話である。このなんとも飛躍した教訓劇のような舞台に、なぜか観客は涙ぐみ、拍手を送った。

### ■ 「新劇」とは一線画した評価

この作品をどう評価するかについては随分議論もあつたようだが、多くの観客が人間的な共感で受け止めたことは事実で、とかく戯曲の文学性、思想性を演じてみせる新劇の手法と違って、観客の心に直接働きかける、劇場独特の上演方法が成功したと考えられる。

当時新進の評論家・哲学者として知られていた鶴見俊輔は「様々な批判があることは承知しているが、この劇を見たとき、私は感動した。」と書き、「民衆の持つ保守性を無視することなく、保守性にたいして、積極的評価をすることが必要である」とも書いている。  
 (『泥かぶら』パンフレット)

青野季吉(文芸評論家)、本田多一郎(京大教授)、武者小路実篤(文学者)、大衆芸能を哲学の題材としていた法政大学教授・福田定良など、演劇評論家以外の知識人たちからは「不思議な明るさに満ちており、生き生きした芝居」と期待の声が寄せられている。

### ■ 共に生きる視点・『市川馬五郎一座てんまつ記』

『泥かぶら』の成功によって、価値観の違いを乗り越える芝居を創れないか。真山美保は第三作で、「右」か「左」か「進歩」か「保守」かで揺れる時代に向かって、

人間らしい心をたどりながら、相互理解に到達する作品に取り組む。1954年12月の芸術祭参加作品『市川馬五郎一座てんまつ記』である。これはまた大がかりな作品で、登場人物50名あまり。

時代から取り残された旅芝居の一座が、最後の舞台をと、ある炭鉱町にたどり着き満員の客を集めるが、突然炭鉱のストライキがはじまり、幕を開けられなくなる。乗り込んできた炭鉱労働者たちはストライキのための集会所になったから、即刻小屋を明け渡してくれと迫る。時代の先端に立つ炭鉱労働者と古いしきたりに生きる旅芝居一座……。葛藤の末、不思議な交流がはじまり、一座は「士気高揚大会」の舞台を演じて、観客の大喝采を受ける。鶴見俊輔の言う「旅芝居一座の保守性と組合労働者の進歩性とのあいだの対話を軸として進んでゆく劇」である。  
 本格的な再演は5年後の1959年になるが、初演ではヴェリテ時代の仲間立川恵作や佐野浅夫が協力している。

(以下次号)



〈写真は『市川馬五郎一座てんまつ記』初演の舞台〉

## NPO現代座 誰でもできる朗読教室

講師 長谷川葉月

2月26日(水)に「誰でもできる朗読教室」第8期生発表会が現代座会館3階小ホールでありました。今回は13名が6ヶ月の受講の成果を発表してくれまし



(後列左より) 今井治江、佐藤忍、手塚修、本田典子、小野寺優子、江花幸子、古明地節子、石川秀樹  
(前列左より) 木村サチ子、高嶋悦代、井上尚子、長谷川葉月(講師)、尾花はるみ、井上照美

## 第8期生発表会 作品名・作者・朗読者 (★印は初参加)

第1部	「モチモチの木」	斎藤隆介	本田典子★
	「ないたあかおに」	浜田広介	井上尚子
	「名人伝」	中島敦	尾花はるみ★/古明地節子
	「へっぶりよめさま」	松谷みよ子	江花幸子★
第2部	「手ぶくろを買いに」	新美南吉	佐藤忍★
	「第二夜」『夢十夜』より	夏目漱石	小野寺優子★
	「歌姫」	フランソワーズ・サガン	今井治江
第3部	「㊦」	神吉拓郎	手塚修
	「水」	幸田文	高嶋悦代
	「朝顔」	藤沢周平	井上照美
	「オートバイ」	岸田今日子	木村サチ子
	「葬られたる秘密」	小泉八雲	石川秀樹

## お知らせ 誰でもできる朗読教室第9期は3クラスになりました

2020年6月開講 基礎訓練から舞台発表までの12回講座

開講期間/2020年6月～11月

①水曜日 昼クラス(原則第2週・第4週) 13:30～16:30(満席)

②水曜日 夜クラス(原則第2週・第4週) 18:00～20:30(若干名募集)

③木曜日 夜クラス(原則第2週・第4週) 18:00～20:30(若干名募集)

定員/各クラス8名程度 料金/受講料20,000円

※お問い合わせ(現代座) TEL 042-381-5165 FAX 042-381-6987

みなさんと集まって、お腹から声を出したり、口を動かす練習をしたり、一つの作品を読み合ったりして解釈の違いを話したり、理解を深めたりといった朗読活動を早く再開したいと願っています。

さて、発表会が終わり、通常ならば第9期を4月に開講する予定でしたが、緊急事態宣言が発令されたため開講が先延ばしになっています。現在は6月開講予定で準備を進めています。現在は6月開講予定から今までの授業とは違った形にせざるを得ない部分も出てくるでしょう。2月26日の発表会が開催できたことは幸運なことだったと、ここ3ヶ月の社会状況を振り返っています。

ひとつひとつの朗読によって作品世界に引き込まれ、心豊かな時間を味わうことができました。

た。そのうち5名が初参加の方です。今回の発表会は新型コロナウイルス感染症対策を徹底した上での開催という、いつもとは違う状況でした。19名ものお客様が少ない状況を覚悟していましたが、当日は19名ものお客様がご来場くださったことは大変有り難いことでした。空いている座席には出演していない仲間が座って、お互いにゆっくり朗読を聞き合うこともできました。

この講座では発表会用に直前の特別稽古などは設けていません。ですから最後の稽古は2週間前に終了し、あとはそれぞれ自宅で練習してくださいね、となるので、私にとっては2週間ぶりに聞くみなさんの朗読。

なかにはあまりに違った朗読をするので(もちろん良い意味です!)思わず「ちよっと、どうしたの?」この2週間誰かほかの朗読の先生に習ったの!」と聞いてしまい、「やったく、何言ってるんですか?」先生「だけです」の答えに「だって、こんなに上手になっちゃって」と、こんな会話もありました。きつとすごい練習されたのだと思います。やはり、学んだ朗読をお客様の前で発表することが何より成長に繋がることを実感しました。3時間超という長時間の発表会でしたが、楽しい朗読に会場で大笑いする場面もあり、涙する感動物語があったりと、普段の生活では体験しない喜怒哀楽の感情が大いに揺すぶられました。

## 現代座会館 2月～5月 活動日誌

2月15日 桑原重美氏来訪

17日 眞谷栄一、政子氏来訪

23日 「現代座レポート81号」発送作業

3月7・15日 緑町第2町会役員会

毎月第3木曜日「緑町ふれあいサロン」  
(4月から休み)

## 【現代座ホール】

2月4～6日 ふるきやら「瓶が森の河童」稽古

22日 ハトノス

3月1日 「ハトノスの記憶についての短編集」稽古  
ハトノス

「ハトノスの記憶についての短編集」稽古

## 【三階小ホール】

2月7～9日 「バラエティ劇場」公演

23日 津田リトルコンサート

12・26日 朗読教室ゲネプロと発表会

3月21日 「サティシユの学校」上映会

22日 劇団6・7拍子稽古

4月12日 今井「岡田京子歌の講座」

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

## 【定期使用 二階サロン】

毎金曜・日曜日 教育文化経営学院(学生支援)

(4月から休み)

毎水曜日 熟年パソコンサークル (4月から休み)

隔木曜日 ちび熟年講座 (4月から休み)

## ◆◆ 編集後記 ◆◆

★コロナ騒動でなかなか先が見えず、いろいろ悩んだため発行が遅くなり、今号は月遅れの6月1日号になりました。これからは6月・9月・12月・3月の年4回発行になります。

★この間、思いがけない電話がいくつもありました。部屋で自粛していたら古い現代座の資料が出てきて、様子を尋ねてくださったり、「現代座がつぶれていないか心配で。やれることは何でもやるから」と励ましてくださったり。本当にありがとうございます。

★個人的なことですが、私(木下)はこの3年間、長野で母の介護をするため、東京と長野を行ったり来たりで、会館への電話も長野で受けることが多く、利用者の方々に負担をかけることもありました。けれど会館の管理、ホールの公演や稽古のスタッフ活動では現代座のメンバーが気をつかっていろいろ助けてくれました。

母は昨年末、98歳6ヶ月で静かに旅立ちました。95歳までは全て自分でやっていた母にとっては、動けなくなってきたからの3年間はつらい日々だったと思います。でもずっと親に心配ばかりかけて芝居を続けてきた私にとっては、母に寄り添って過ごせた幸せな毎日だったと、今は思えます。

もうすぐ99歳の父は一人でがんばっています。私も少しずつ活動を再開しようと思っています。

(木下美智子)

## NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

## ★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円  
協賛会員 10,000円(1口以上)  
郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座